

トゥルークの海賊 1

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の▶ キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

「エルヴァリータ・シノークと申します」

自己紹介した女性はケリーに握手を求めてきた。

百九十六センチのケリーと向かい合うと頭一つ分背が低い。女性としては標準の体軀だ。

とても二十一歳の息子がいるようには見えない、みずみずしく美しい人である。

上品で華やいだスーツと靴がよく似合っているが、ただ一つ驚かされるのは、整った顔に化粧でも隠しきれない鮮やかな刺青が施されていることだ。

これはトウルークの僧侶の証である。

トウルークの僧侶には異性に触れてはならないという厳しい戒律があるが、彼女は還俗した身なので、ケリーと握手しても問題はないらしい。

「ご主人とお名前が違いますか、何か事情が？」

ケリーが尋ねると、エルヴァリータの夫のダレスティーヤ・ロムリスが答えた。

「トウルークでは結婚後の姓は統一しても別々でもよいのです。わたしどもは別姓を選択しました」

ダレスティーヤの顔にも鮮やかな刺青がある。

この人も還俗した身なので至って普通のスーツと靴を身につけているが、真っ白な髪は現役の僧侶と同じように長く伸ばして一つに束ねている。

ケリーと握手したエルヴァリータは眼を見張り、感嘆したような息を吐いた。

「……驚きました。まさか、これほど大いなる闇に愛されていらつしやる方が現世におられるとは」

苦笑しながら肩をすくめたケリーだった。

先程、ダレスティーヤと握手した時にもまったく同じ感想を言われたからだ。

エルヴァリータは続いてジャスミンと握手して、やはり黒い眼を見張った。

「……すばらしい」

ちらりとケリーを見て、視線をジャスマミンに戻す。
 「生半なまなかの女性ではこの方の伴侶は到底務まるまいと思いましたが、それは奥さまも同じことなのでですね。ご主人をととても愛していらっしゃる」

思わず微笑したジャスマミンだった。

「よかった。あなたにまで『本当に女性ですか』と言われたらどうしようかと思いましたよ」

「夫がそう申しましたか？」

「ええ、サリース・ゴオランにも。確かにわたしはご覧の通りの大女ですが、それでもぱっと見て男か女かわからない部類ではないはずと思いますよ」

エルヴァリータは真顔で首を振った。

「ミズ・クーア。それは違います。夫もサリース・ゴオランも体格のことを言ったのではございません。二人と同じことをわたしも思いました。肉体的にもあなたは実にたくましい方ですが、あなたの魂たましいはそれ以上にお強い。女性とは思えないほど雄々しく

気高く、燃えるような力強さをお持ちです。通常、

このような魂はとても女性の範疇はんちゆうに収まるものではありません。男性にも滅多におられません」

エルヴァリータは断言して、微笑した。

「その強さは別としても、あなたのご主人に対する深い愛情は疑いようがありません。ご主人には他に我が身と慕したうほどのどなたかがいらっしゃるご様子ですのに——あなたはその存在を当然のものとして受け入れていらっしゃる」

ジャスマミンも笑って頷うなずいた。

「ご主人にも先程まったく同じことを言われました。あなた方の言うもう一人は夫の手足同然のものです。あの存在も含めてのこの男ですから、夫の胴体どうたいだけ愛して手足は愛さないといいききますまい。曲がりなりに妻としてはね」

ケリーとジャスマミンは長年の友人であるマヌエル一世に相談があると言われ、中央座標セントラルの主席官邸を訪ねたところだった。

一世は高齡を理由に、既に政界を引退しているが、百歳を超えた今でもその影響力は衰えていない。

そして一世とともに二人を待つていた人がいる。

惑星トウルークの外務大臣兼航宙総省長官という肩書きを持つラルス・バックマンと、同じくトウルーク人のアドレイヤ・サリース・ゴオランだ。

アドレイヤはトウルークの位の高い僧侶であり、政治には深く関われないという建前ながら、実際は政治家たちから何かと頼みにされている存在らしい。

初対面の彼らが互いに挨拶を済ませ、いざ一世の話を書こうとした時のことだ。苗字の異なる夫妻が主席官邸の客室に闖入してきたのである。

バックマンも夫妻が来ることを知らされておらず、一世もこの二人とは初対面だというのだからまさに闖入者だ。しかもそこまで大胆な真似をした二人の身分は市役所に勤める職員に過ぎないという。

奇妙な話だが、さらに奇妙なことが起きた。

エルヴァリータがバックマンに眼をやり、至つて

穏やかに言つてのけたのだ。

「バックマンさん。席を外していただけませんか」

「ミズ・シノーク？」

バックマンは驚いた。何といつてもバックマンは国家を代表する立場であり、エルヴァリータは違う。

しかし、夫のダレストイーヤも言つた。

「お願い致します。まことに申し訳ありませんが、クーアご夫妻と忌憚なく話し合うためにもこの場はわたしどもに任せていただきたいのです」

「あなたがここでご相談する予定の内容についてはわたしも夫も詳細を理解しておりますし、首相からその旨を託されてもおります」

繰り返すが、この二人の身分は惑星トウルークの首都パーヴァルの市役所職員に過ぎない。

バックマンが非公式にマヌエル一世に相談を持ちかけたところから判断しても、国政に関わる重要な相談に違いないのに、市役所の職員が大臣に対して、この場は自分たちに任せて退席しろと言う。

他の国では考えられないことだが、バックマンは素直に従った。

「わかりました。ここはご夫妻にお任せ致します」

部外者のケリーとジャスマンのほうが「いいのかそれで？」と啞然あざんとしたくらいだが、バックマンはマヌエル一世に向かって言った。

「ご夫妻は公式の身分こそ市役所の職員ですが、実際にはトゥルーク政府の中枢に関わる方たちです。

首相の信頼も厚いお二人でもありますので、お話しはご夫妻にお願い致します。ミスタ・クーア、ミズ・クーアも。よろしくお願い致します」

エルヴァリータは自分の秘書に言った。

「クロエ。あなたも遠慮してください」

一市役所員になぜ秘書がいるのか理解に苦しむがクロエ・ブレメルも地味なスーツと対照的に顔には刺青がある女性だ。静かに頷いた。

アドレイヤも自分の付き人たちに言った。

「あなたたちも下がってください」

彼はゴオランという位にある。トゥルークの僧は位が上がると制限も多くなり、お付きの人なしには動けないらしい。初老の僧侶が一人、若い僧見習が二人いたが、素直に一礼して部屋を出て行った。その際、初老の僧侶はダレストイーヤとエルヴァリータに深々と頭を下げて合掌がっしょうしていった。

これでこの場に残ったのはケリーとジャスマン、マヌエル一世とロムリス夫妻（苗字は違べんぎうが便宜上、こう表現する）とアドレイヤの六人だ。

エルヴァリータが申し訳なさそうにケリーとジャスマンに会釈えしやくしてきた。

「差し出がましいことをして申し訳ありませんが、お二人のことはバックマンさんには言わないほうがよろしいかと判断しました」

「わたしたちのことと言いますと？」

答えたのは夫のダレストイーヤだった。

「お二人がクーア財閥総帥そうすいのクーアご夫妻ご本人であるということですよ」

ケリーもジャスマンもちよつと苦笑した。

「そりゃあまた大胆なご意見だ。同姓同名の別人と考えるのが普通だと思いますがねえ」

しかし、ダレスティーヤにもエルヴァリータにも確信があるらしい。アドレイヤにもだ。

ジャスマンとケリーに合掌して言った。

「俗世を離れたわたしでもクーア財閥の名は存じております。そもそも三十年前、数百年ぶりに連邦の外洋型宇宙船がトウルークにやって来たのもクーア財閥がシヨウ駆動機関ドライヴを開発したことがきっかけと聞いております。もちろん、マヌエル一世はご存じなのでしょう？」

一世が答えを躊躇ちゆうちよする間にケリーが反論した。

「しかしですね、今年は共和宇宙標準暦九九二年だ。二代目総帥のジャスマンは今から四十年以上も前に病気で、三代目のケリーは六年前に七十二歳で亡くなってるんです。それが俺たちだと言うなら、とつくに死んだ人間がここにいるという事実をあなたは

どう考えているんです？」

常識ではあり得ない。だが、アドレイヤにとってそれはたいした問題ではないらしい。

三十代前半にしか見えないケリーの顔を見つめて、目をほころばせて微笑した。

「先程お師さまがおっしゃいました。大いなる闇があなたを愛し、あなたをこの現世に留めたのだと。わたしにはそれで充分です」

間違っではないが、その話を頭から信じる人は初めてである。

ちなみにアドレイヤの言う「お師さま」はダレスティーヤのことだ。年齢はあまり変わらないように見えるが、アドレイヤはダレスティーヤが還俗かたした今も頑かたなに師弟の礼を取っている。

ジャスマンがダレスティーヤに尋ねた。

「ミスタ・ロムリス。あなたも奥さまも、それでも自分は特異能力者ではないと言われますか？」

「申します。わたしには人の思考などは読めません。

できるのは感じ取ることだけです」

エルヴァリータも頷いて言った。

「夫の言うとおりでです。わたしたちにわかるのは、お二人が常人とは程遠い方だということくらいです。こちらでは『オーラがある』と表現するようですが、これほど独特の鮮やかな靈氣オーラをお持ちの方は滅多にいらっしやいません。真に偉大な芸術家や政治家の中にはごく稀まれにお二人に匹敵ひつごする方もおられますが、それがご夫婦揃そろって並び立っている。お見事です。このようなご夫婦は恐らく百年に一組あるかないか、そのくらい稀有けうなことです」

ダレストイーヤが後を受ける。

「そしてお二人のお名前です。ご本名なのでしよう。その点を踏まえて考えますと、お二人はあのクーア財閥の二代目三代目総帥本人であると判断するのが妥当たとうだということになります」

その総帥夫婦は顔を見合わせて肩をすくめた。

これはもう諦あきらめるしかないらしい。

マヌエル一世も観念したように苦笑した。

「ミスタ・クーア。ミズ・クーア。お座りください。あらためてお話ししましょう」

トウルークの僧侶には異性と同席できないという戒律もあるが、この部屋には一人掛けの椅子が点在しているだけで大きな机はない。

一つの机を囲むのでなければよしとされるらしい。六人がゆったりと腰を下ろすと、マヌエル一世はジャスマミンとケリーに尋ねた。

「お二人とも。惑星トウルークについてどのくらいご存じですか」

「ほとんど何も知りません。何しろその時分は冷凍睡眠中でしたから」

ジャスマミンが言い、ケリーが答えた。

「俺も詳しいことは知りません。こちらの皆さんに隠しても始まらないようですから正直に言いますが、当時はシヨウ駆動機ドライブ関絡がらみで眼の回るような忙しさでしたから、知っているのは報道で耳にした程度に

過ぎません。約三十年前に連邦との国交が復活した、もつとも古くもつとも新しい連邦加盟国であること、中央座標セントラルから十七光年という近距離にありながら《門ゲート》の性質上、数百年に亘わたって他国との行き来が絶たれていたこと、その結果、一風変わった独自の文化を築いてきたこと。そうした特殊な事情で今は渡航が制限されていることくらいです」

「概ねおっしゃるとおりですが、渡航制限の理由は実は他にありません」

「こちらの皆さんの勘の鋭さですか？」

「海賊。これはもう勘が鋭いで片づけられる次元の問題ではないと思うぞ」

ジャスマミンの意見に一世が頷いた。

「バックマン氏のような一般市民は——あえて一般市民と言いますが、わたしどもと何も変わりません。しかし、トゥルークの僧侶、中でもサリザン以上の高僧はまったく話が違ってきます」

ケリーがロムリス夫妻に訊きいた。

「確かお二人のご子息もサリザンでしたな」

さつきジャスマミンもケリーも会った。

その子はライジャ・ストーク・サリザンと言って、驚いたことにルウの親しい友達だという。

早々に出て行ってしまったのであまり話す機会はなかったが、ジャスマミンが呟つぶやいた。

「ルウの友達ならご子息はリイやシエラとも仲よくしているかもしれませんね」

エルヴァリータが身を乗り出した。

「それは先程あの方と握手した時に感じたのです。黄金に輝く、あの方の闇を払うほど目映まばゆい光を放つ存在を。その方のことでしょうか？」

アドレイヤが頷いた。

「おっしゃるとおりです。マリス・ゴラーナ。その太陽は大いなる闇の傍そばで燦然さんぜんと輝いておられます」

エルヴァリータが困惑の表情で言った。

「サリス・ゴオラン。その名はよしてください。わたしはとうに僧籍を離れた身なのですから」

「いいえ、あの方は先程確におっしゃいました。エルヴァリータ・マリス・ゴラーナ、そしてダレス・ティーヤ・クレイス・ゴオランと。それどころか、クレイス・ドルガンと。——わたしはこの日を待ち望んでいたのかもしれない」

一世が慌あわてて言った。

「ゴオラン。すみませんが、そのお話はあらためてお願いします」

ルウがダレス・ティーヤをその名前で呼んだことがアドレイヤには大事件らしいが、これではさっぱり話が進まないのだ。強引に話を戻した。

「三十年前、惑星トゥルークが新たに見出された時、連邦はあまりトゥルークに関心を示しませんでした。その結果とんでもない大失敗をしました。連邦では今も密かに『パーヴァルの悪夢』と言い伝えられているほどの大失敗を演じたのです」

ジャスミンは素直に耳を傾け、当時を生きていたケリーは不思議そうに言い返した。

「はて。俺はその頃、現役ばりばりの総帥でしたが、そんな話は初めて聞きますよ」

「もちろんです。言えるはずがありません。何より当時のあなたには他にせねばならない仕事如山ほどあったはずです」

「ええ。今も言いましたが、シヨウ駆動機ドライブ機構搭載の宇宙船をいかに世間に浸透させるか、それに伴い、『駅ステーション』の処遇をどうするか、やらなければならぬことは確かに山積みでした」

「連邦も同じです。当時の連邦はシヨウ駆動機ドライブ機構という新しい移動手段に夢中になりました。まだ見ぬ居住可能型惑星、未発見の資源を捜すことが重要視されており、実際に再発見された惑星トゥルークの扱いは極めてそつけないものでした」

「トゥルークが貧しい星だったからですか？」

「こちらのお三方の前で言うのは心苦しいのですが、隠しても始まりますまい。そのとおりです。最初は熱心でしたが、トゥルークが昔ながらの文化を守り、



ゴオラン/ゴラーナ



ドルガン/ドガール

ダイヤモンド

シュヴァリン/シュヴァール

サリザン/サザール



R.K.S

近海型宇宙船すら持たないことがわかると、急速に熱が冷めたと申し上げてよろしいかと思えます」

当時の連邦政府の心境が何となくわかる気がして、ケリーは言った。

「せっかく見つけたのにあんまり値打ち物じゃない。だったらいらぬ。——そんなところですか」

「忌憚のないところを申せばそうなります。しかし、居住可能惑星には違いない。しかも中央座標セントラルからわずか十七光年です。シヨウ駆動機関ドライブが登場した今、ご近所と言っても差し支えない。捨ててしまうにはあまりにも惜しい星です。いえ、むしろ捨てるのは問題外でした。当時の連邦政府は辺境に詳しい議員数名を中心とした交渉団を編成し、トゥルークとの交渉に当たらせただけですが、結果的にこれが最悪の事態を招きました。——全権を委ねられた交渉団が考えたのはトゥルークの植民地化だったのです」

思い切った言葉にジャスミンもケリーも軽く眼を見張ったが、そこは大財閥の総帥だった二人だけに、

きれいな事は言わない。

ただ、当時の事情を知らないジャスミンは疑問を感じた。相手は曲がりなりにも独立国だ。

「わたしの知る常識では連邦がトゥルークの主権を認めないなどとやったら大問題に発展するはずですよ。それとも当時の社会情勢ではそれもやむなしと容認されたのですか？」

ケリーが言った。

「無理だな。表沙汰おもてぎたになつたら国際社会から罵々しょうごうの非難をあびるのは免れない。多分そこところはうまくごまかすつもりだったんだろうよ」

一世が領いた。

「そのとおりです。あくまで国際社会から隔絶していたトゥルークに『援助と支援の手を差し伸べる』という建前を貫き、その実トゥルーク側には極めて不利な条約を締結させようとしたのです。もつとも交渉団は騙だましているつもりなどなかったのです。もつとも何百年も鎖国状態の続いた文化の遅れた国あなどと侮り、

多少強引でも条約を結んで開発の手が入り、生活がどんどん豊かになってくれれば、現地の人々は連邦に感謝するに違いないと思ひこんでいたようです」

「それは現地の人間からすると、大きなお世話とも言えますな」

ジャスミンの指摘に一世は苦笑して続けた。

「おっしゃるとおりかもしれません。ここで当時のトウルークについて説明しますと、複数の地方自治体の集合体に過ぎなかつたのです」

「中央政府がなかつた？ その状態でどうやって国際条約を締結するんです」

ダレストイーヤが口を開いた。

「三十年前、連邦の調査船が初めて着陸した土地が現在の首都パーヴァルですが、当時は単なる高地に過ぎませんでした。そこにも無論、独自の自治体がありました、必然的に連邦との交渉に当たりました。彼らは自分たちはこの惑星の一地方自治体に過ぎず、他の自治体には関与していないと説明したのですが、

連邦の交渉団はその説明をあえて無視したのです」

「無視した？」

「はい。地方自治体の代表に国際条約を締結させ、それを盾たてに、惑星トウルークは連邦の管理下に入ることを『自ら』選択したのだと。そういう筋書きに持っついていこうとしたようです」

ケリーが嘲笑ちやうしょうした。

「要するに、最初に出会った先住民を騙だまらかして、国際社会で通用する公文書に署名させてしまえば、後はこつちのものというわけですか」

お粗末な手法ではあるが、効果的でもある。

連邦がトウルークを国際社会から遠ざかつていた辺境国だと侮あやつていたならなおさらだ。

一世が苦い顔で頷いた。

「その上で、厚かましくもその条約締結をそっくり自分たちの手柄てがにしよとしたのでしよう。こんな不平等条約が実際に結ばれていたら大問題になったでしょうが、幸か不幸かそうはなりませんでした。

トゥルーク人には複雑な国際条約文など読み解けるはずもないと侮り切った交渉団は、口頭の説明とはまったく内容の違う書類を用意して自治体の代表に署名を求めました。ところが、パーヴァルの代表は怪訝な顔で尋ねてきたそうです。「あなたのお話は実際の条約の内容とはずいぶん異なるようですが、どちらが正しいのですか？」と」

ジャスマンが吹き出し掛けて呑み込んだ。

ケリーも笑いを噛み殺している。

一世は嘆息して話を続けた。

「そこですぐに連邦政府の中枢に諮ればいいものを、失敗した烙印を押されるのを恐れたのでしような。

責任者が複数いたことも災いしました。『向こうの連中がへそを曲げてゐるみたいだから、今度はおまえ行つて話をつけてくれ』とまあ押し付け合いになり、順繰りに出かけて、次々返り討ちに遭つたのです」

間抜けにもほどがある——と呆れながらケリーは指摘した。

「普通そこで相手の特異能力を疑いませんか？」

「もちろんです。しかし、それを調べる手段がない。特異能力検査にはかなりの手間と時間がかかります。まして、心を読まれているかどうか確かめたいから検査を受けてくれなどは交渉相手に言えません。

しかし、自分の心を読まれてありがたく思うものはいませんから、交渉団はトゥルーク側の反応を試すつもりで、知識のない小役人を全権大使に仕立てて、とにかく署名させると言い含めて向かわせました。ところが、その役人が交渉の席に着いた途端、『なぜ権限をお持ちでない方がいらしたのでしようか』と不思議そうに言われてしまう始末です」

大型夫婦はまたも笑いを噛み殺しながら言った。

「おやおや……」

「それはもう確定的でしょうに」

「はい。ですが、彼らも交渉に関しては熟練者です。どうにも釈然としないものがあつた。心を読まれているにしては腑に落ちないことが多すぎたのです。

そこでよく見ると、連邦との交渉は自治体の代表が行っているものの、その席には常に顔に刺青をした僧侶がいて、代表は何やらしきりと僧侶に相談している。交渉団がこれを今まで気に留めなかったのは、トウルークの地方では僧侶は司法の代わりを務める権限を持ち、住民の信頼は絶大なものがあると説明されていたからです。初めて僧侶の存在をまともに意識した交渉団は、さては特異能力者はこちらかと思いき立ちました。その頃には僧侶は異性に触れることはできないということはわかっていましたので、今度は女性議員を交渉に向かわせたのです」

ジャスマンが指摘した。

「少々短絡的な発想ですな。女性が相手なら能力を発動できないとでも？」

「いいえ。身内の恥を申すのは気が重いのですが、どうやら強引に握手を迫って、交渉の場から僧侶を追い払おうと考えたようです。しかし、トウルーク側もさるもので女性の僧侶を出してきた。そして、

この女性議員も不思議そうに言われてしまうのです。『あなたは どうして嘘ばかり言うのですか?』と」

ジャスマンもケリーも実に複雑な顔だった。

他国との（まだ主権国家ではなかったようだが）交渉の最中にそれを言われる使者の心境を思うと、気の毒と思うよりどうしても笑いがこみ上げてくる。「事実を言い当てられて女性議員はひやりとしたが、彼女も政治家です。そもそも交渉の席で嘘の条件を並べるのが間違っているのですが、だからといって胸のうちを見抜かれてそれを素直に認めるようでは交渉者とは申せません。ことさら心外の様子を示し、憤然と抗議したそうですが、またしても訝しげに、しかも非常に気の毒そうに言われてしまうのです」

一世は何とも言えない顔で続けた。

「もしかして、あなたは自分の言葉がすべて嘘だと見抜かれていることに気づいていないのですか——と」

我慢に我慢を重ねていた二人に限界が訪れた。

ジャスマンとケリーは盛大に吹き出してそれぞれ感想を述べた。

「そ、それは、高級カジノのVIP専用テールのディーラーが『なぜいかさまをするんですか?』と客に指摘されるくらいの屈辱くつじやくですな!」

「いやいや、大家で知られる芸術家が最新作の前に、『弟子の作品なのに、どうしてあなたの作品として名前を入れて発表したんですか?』と言われるのと同じくらい致命的な打撃だぜ! 立ち直れねえよ」
笑い転げる二人に、トゥルーク人三人が感心したように頷いた。

「的確な感想です」

「この話を笑い飛ばしてくださる健全な精神の方に初めてお会いできました」

「なるほど。あの方たちには屈辱だったのですね」

対照的に一世の表情は重苦しい。

「ここに至って交渉団はようやく政府に泣きつき、当時の連邦主席パニ・ダイクスも愕然がくぜんとしました。

しかし、不平等条約は論外としても、連邦に有利な条件で条約締結したいという希望は彼らも同じです。その時点ではまだ僧侶全員に特異能力があるなどと誰も思つて——もとい信じてはいませんでしたので、あくまで協力を装う美辞麗句を並べた文書を作成し、惑星調査や太陽系開発などを連邦主体で行うように持つていこうとしました。百戦錬磨れんまの政治家たちがそれこそあの手この手を駆使したのですが……」

まだ眼に笑いを残しながらジャスマンが言った。

「ことごとく失敗したわけですか」

「おっしゃるとおりです。辺境国に条件を吞ませることなど赤子の手を捻ひねるようなものだど侮つていた連邦は完全に打ちのめされました。どんなに有能な人間もトゥルークとの交渉に行かせたが最後——皆、我こそはと自信満々で出向いたようですが、自信も誇りも木こっ端微塵ぼみじんに粉碎され、しばらく使いものにならなくなるといふまことにもつてありがたくない事態が発生したのです。まさしく『パーヴァルの悪

「夢」です。とうとうこの老骨に声が掛かりました」

一世は嘆息してアドレイヤに眼をやった。

「その時にお会いしたのがサリース・ゴオランです。当時はサリース・サリザンでしたが、わたしを一目見ておっしゃった言葉が忘れられません。『やっご自分の言葉に責任を持つ方がいらしてください。嬉しく思います』と。この方はまだ十代の若さで、わたしは八十に近い年寄りでしたが『恐縮です』と言うしかありませんでしたよ」

ケリーが笑顔で言った。

「全然知りませんでしたよ、一世。どうしてそんなおもしろい話を教えてくれなかったんです？」

「言えませぬよ、とても。——わたしにも守らねばならない仁義というものがあります」

そこからトウルークと連邦の本当の話し合いになった。トウルークは急激な変化は望まなかったが、自由跳躍が可能になった以上、これからは外国からどんどん宇宙船がやって来るのはわかっている。

好むと好まざるとに拘わらず扉は開かれたのだ。

主要な地方自治体の代表が集まって協議を重ね、今までのような鎖国状態を続けるのは好ましくない、地方ごとの自治もあらためるべきだと意見は一致し、国家としての代表者を立てることを決めた。

そして連邦もこの頃はトウルークに対して極めて慎重になっていた。

文化人類学や民俗学、宗教学の学者が文化保存の見地から現状維持を強く訴えたこともあるが、この惑星には特異能力者が大勢いるのではないかという疑惑から一般人の渡航を禁止したのである。

「トウルークの正式な連邦加入後、連邦は大々的な調査団を組織してトウルークに派遣しました。幸い高位の僧侶の方々も、快く調査に協力してください、見本は取り放題だったようですが、いくら調べても何も出なかったのです」

ケリーとジャスミンは訝しげな顔で念を押した。「しかし、この人たちの勘の良さはどう見ても普通

「じゃありませんよ」

「本当に特異能力じゃないんですか？」

「少なくとも我々が認識している種類の特異能力ではないのは確かです。その根拠として第一に彼らには固有名詞がわかりません」

一世と初めて会った時も、アドレイヤには一世の名前がわからなかった。

ダレストイーヤがケリーに向かって言う。

「わたしも妻もあなたには奥さまの他に半身はんしんと慕うどなたかがいるようだと感じました。ですが、その方の名前も姿もわかりません。そもそも、その方が人間であるかどうかすら判然としません」

苦笑したケリーだった。

「ですから、それがわかるところがただの人じゃないと思うんですがねえ」

ジャスミンも頷いた。

「同感です。感じ取っているだけだと言われるが、感じ取る範囲が尋常ではあり得ません」

エルヴァリータが静かに言った。

「わたしたちがただの人ではないというのでしたら、それはすなわち、トゥルークの高僧はただの人ではなれないということでしょう」

アドレイヤが頷いた。

「神の前では位に関係なく、僧侶は等しい存在です。しかし、高位の僧侶になれるものとなれないものの資質の違いは歴然としております。トゥルークでは誰もがその事実について呑み込んでいるのですが、残念ながら外の方にはなかなかおわかりにならないようですね」

一世が言った。

「前置きが長くなりましたが、ここからが本題です。最近、トゥルークの領海内に頻繁ひんぱんに海賊が出没して問題になっております」

ジャスミンが尋ねた。

「人質を取って身代金を取る海賊ですか？」

「いいえ、狙われるのは貨物船ばかりだそうです」

ケリーが首を捻る。

「貨物船というと連邦から物資を運ぶ船ですか？」

「それが、襲われるのはトゥルークからの輸出品を積んだ船ばかりなのです」

「輸出？ はて、トゥルークは確か自由貿易も制限されていたと思いましたが……」

エルヴァリータが説明した。

「五年前から試験的に貿易を開始しました。地方の特産物や工芸品などが主な輸出品目です」

「という……一隻の貨物船に食料や加工品、雑貨などを混在して積んでいるわけですか」

「そうです」

「その積荷の中に高価な宝石や稀少金属などは？」

「ありません」

ジャスミンが首を傾げて夫を見た。

「現代の海賊事情には詳しくないが、その荷物ではあんまり稼ぎにならないんじゃないか？」

「そのはずだぜ。農産物で稼ごうと思ったたらよほど

大量にぶんどらない限り儲けにならない。おまけにトゥルークは中央座標の目と鼻の先にあるんだぞ。仕事場としては最悪だ」

ダレスティーヤが言った。

「トゥルークは独自の宇宙軍を持っておりません。

現在は同盟条約に基づき、連邦軍の駆逐艦が交代で領海内を巡回しているのですが、残念ながら海賊の被害はほとんど減っていないのが現状です」

惑星トゥルークはカトラス星系の第三惑星だ。

カトラス星系は第十惑星まであり、一国の領海は、その星系のもつとも外側を公転する惑星から一定の距離までと定められている。広大な範囲である。

駆逐艦一隻で巡回するのは荷が重いといえるが、ジャスミンは納得できなかった。

「輸出入の貨物船なら決まった航路を通るはずですよ。となれば当然、海賊船もそこに出没するはずですよ。共和宇宙最強を誇る連邦軍がそうたびたび海賊船に出し抜かれるとは思えません」

一世が頷いた。

「ごもつともです。ですからバックマン氏も慎重にならざるを得なかつたのです。——よりにもよつて派遣された連邦軍が海賊と密かに通じている疑いがぬぐえなくなつたのですから」

ケリーもジャスマミンも思わず顔色を変えた。

それが事実なら大変なことだ。

「広大な宇宙空間では巨大空母すら点に過ぎません。駆逐艦の探知能力がいくら優れていようと海賊船を発見できなくても不思議ではありませんが、ミズ・クアアがおつしやるように貨物船は決まつた航路を通ります。探知範囲は大幅に狭まるはずです。事実、連邦軍はこれまでに何度か海賊船を発見し、停船命令を出し、威嚇射撃まで行つたそうですが、拿捕に至つた例はありません。これについて連邦軍は、海賊船の足が非常に速いこと、発見した時は残念ながら、海賊は略奪を終えて後は跳躍するだけの状況にあつたこと、ゆえに必死の追撃も及ばず、無念にも

間一髪で逃げられてしまつたと説明しています」

「そんな無念が何度もあつたというのですか？」

ジャスマミンは呆れて言い、ケリーは露骨な軽蔑の表情で断言した。

「それが軍艦との馴れ合いじゃないつて言うんなら、ぜひその海賊船の仕様を知りたいもんだぜ」

「同感だ。威嚇射撃を行つている——つまりは射程圏内に捉えていたということだ。その状況で逃げられるほうが不思議だぞ」

かつては連邦軍の軍人だつたジャスマミンは素朴な疑問を呈した。

「しかし、わからないな。なぜその内通者は経歴を棒に振つてまで海賊に味方するんだ？」

ケリーも別の視点から妻の意見に賛成した。

「しかも——こう言っちゃあ何だが、あまり儲かりそうにない海賊にだ」

分け前をもらうにしても農産物ではよほど大量に盗まない限り、実入りのいい仕事とは言えない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。